

そ つ ぎ ょ う ろ ん ぶ ん

40枚の卒業論文

小嶋雄二著 市川禎男絵



40枚の卒業論文

小嶋雄二著 市川禎男絵



東京大学
三島市立
A26278

913 小嶋雄二

40枚の卒業論文

新日本出版社 1981

156 p 22cm (新日本少年少女の文学13)

こじまゆうじ
小嶋雄二

1942年、東京都板橋に生まれる。専修大学卒業。現在川崎市の小学校教員。

日本児童文学者協会、日本作文の会会員。児童文学研究会所属。

いちかわさだお
市川禎男

1921年東京生まれ。日本美術家連盟会員。戦前、戦後を通じ児童劇の美術、装置に活躍。

「いさごむしのよっちゃん」(新日本出版社)「天使で大地はいっぱいだ」(講談社)「光と風と雲と樹と」(小学館)「雪ぼっこ物語」(童心社)などの絵本やさし絵がある。

新日本少年少女の文学 13 40枚の卒業論文

1981年2月25日 第1刷発行

著者	小嶋雄二
画家	市川禎男
発行者	松宮龍起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 3-11-8

発行所 株式会社 新日本出版社

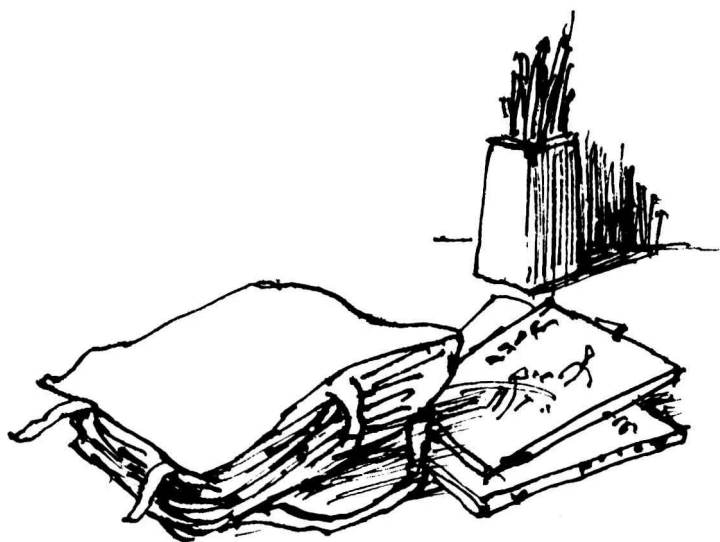
電話 東京(478)3311 振替 東京3-13681

印刷・壮光舎印刷 製本・古賀製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

この本の一部または全体を無断で複製複製(コピー)して配布することは、法律に認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。あらかじめ小社に承諾をお求めください。

も
く
じ



- 1 生^おいたちの記^き……5
- 2 父^たさんは他人^{にん}?……23
- 3 漢^{かん}字^じのよめないお母^{はは}さん……38
- 4 多^た摩^ま川^{がわ}の土^ど手^てで……49
- 5 かっぱらいの手^てさきになる……63
- 6 逃^{とう}亡^{ぼう}犯^{はん}人^{にん}の気^き持^{もち}ち……79
- 7 生^うまれてはじめてパトカーにのる……94
- 8 強^{あき}い子^こだった明^{あきら}……106
- 9 どこでもしつこい父^{ちち}さん……118



10

汚れた顔の二人^{ふたり}……

132

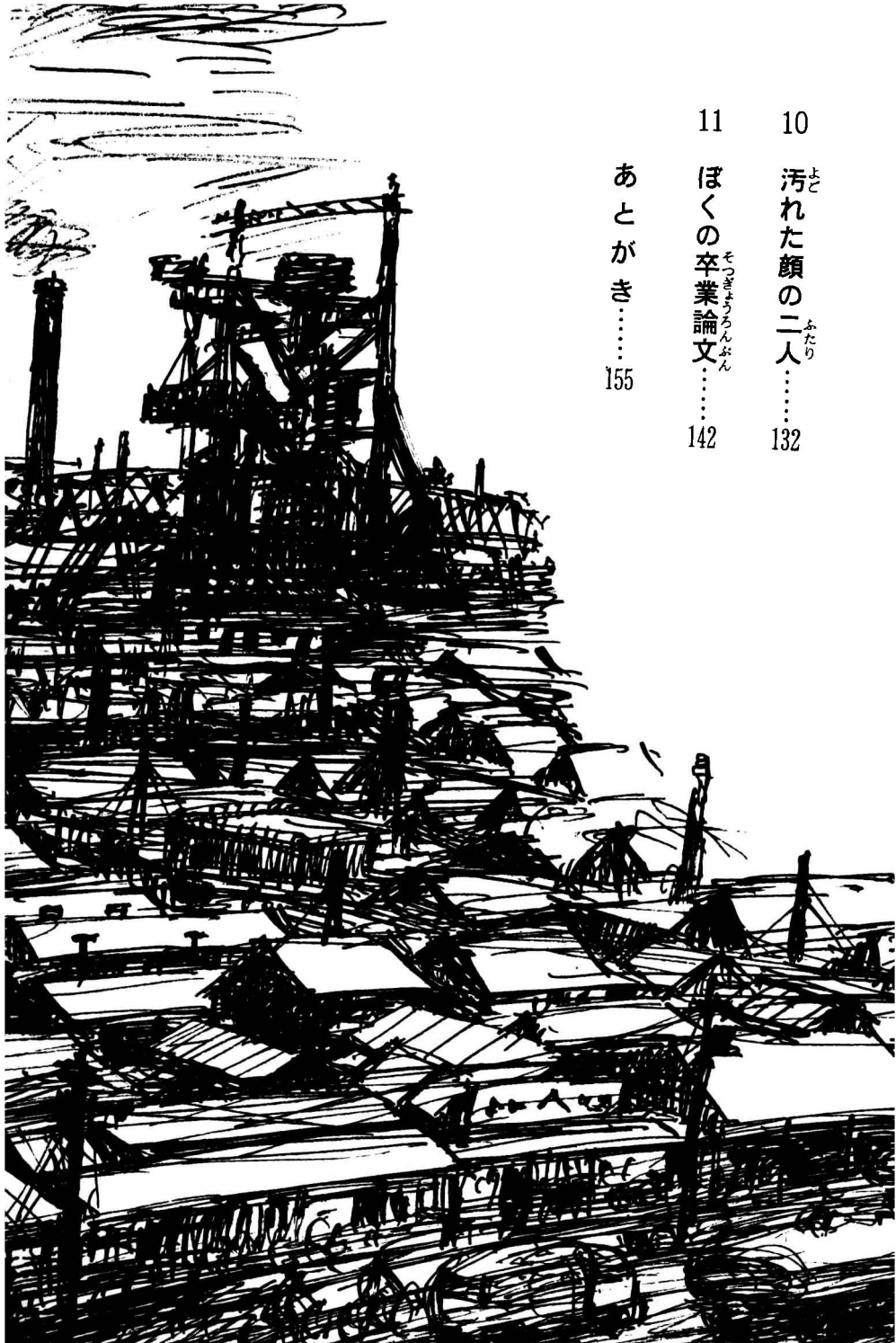
11

ぼくの卒業論文^{そくぎょうろんぶん}……

142

あとがき……

155



装丁・さし絵 市川 禎男



1 生^おいたちの記^き

その日は、二月のきびしい寒さが、ふっとやわらいで、春を思わせる午後の陽^ひのひかりが、教室のおくまでさしこんでいた。

給食^{きゅうしょく}をおえて、六年二組の信^{しん}一^{いち}たちは、十分休みのあいだ、教室でおしゃべりをしながら、つぎの時間^{じかん}がはじまるのを待っていた。

担任^{たんにん}の伊藤^{いとう}武^ぶ先生^{せんせい}は、まだ職員室^{しよくいんしつ}にいるはずだった。五時間^{ごじかん}めは、六年生最後の授業^{じゆぎようせんかん}参観^{さんかん}なので、三階にある信^{しん}一^{いち}たちの教室の廊下^{ろうか}には、もう、お母さんたちがつめかけていて、ときどき笑^{わら}ったり、はずんだ声^{こゑ}でしゃべったりしている。

教室のまえから三列^{さんれつ}めにいる信^{しん}一^{いち}は、窓^{まど}の下^{した}の紅梅^{こうばい}の枝^{えだ}を見おろしていた。

(先生^{せんせい}ったら、作文^{ぶん}、書^かけ書^かけとうるさすぎるよ。おれには、どんどん書けるやつ^{せいちよう}の気がしないよ)
伊藤^{いとう}先生^{せんせい}は、去年^{こぞ}の十月^{じゅうがつ}ごろから、信^{しん}一^{いち}たちに、十二年間の成長^{せいちよう}の記録^{きらく}を中心に、四十枚^{まい}の作文^{ぶん}を書^かくように、いっていた。

洋子や、二、三の作文のうまい子のほかは、みんな、

「じょうだんじゃないよ。四十枚まいなんて、死しにたくなるよ」

「先生は、じぶんは書かないくせに、おれたちばかりにやらせちゃってさ」

と、もんくたらたらだった。

しかし、先生は、「みんなが赤ちゃんだったころのことや、小学校に入学したときのこと、父母ふぼの仕事のようすなど、十二年間のなかで、心に強つよくのこったこと、書かずにはいられないことがあるはずだ。卒業そつぎょうは、小学校生活のひとつの区切りくぎりだ。過去かこをふりかえることは、これからのためにもたいせつなんだよ。がんばって書いてごらん」

と、四十二人の子どもたちにいっづづけてきた。

その「生おいたちの記き」を、先生は、これからはじまる授業参観じゅぎょうさんかんで発表させたいと、予告よこぐしていた。

信一のぶいちのまえにいる、小がらな榎本明えのもとあきらが、ふりむいて、

「ねえ、信ちゃん。ぼく、五枚しか書いていないんだ。発表しろっていわれたらどうしよう」

と、トックリセーターのやせた肩かたをすぼめていった。

「おれなんか、じまんじゃないけど、まるっきりなんだ。明も、そんなにびくつくことないさ。書くことないよ」



「ぼく、そんなことできないよ」

明のやせた顔が、ゆがんだ。

「書くことないよ、とはなによ」

信一のとなりの洋子が、信一と明のやりとりをわりこんできた。

「あんたたち、生[＊]いた[＊]ちの記[＊]、しあげるつもりないんでしょう」

洋子はきれながの目で、なじるようににらみつける。

ふだんはおとなしい明のおが、ほんのり赤くなった。

「そんなこといったって、ぼく、いままで七枚書^{まい}いたのが最高^{さいとう}で、四十枚書けなんてムチャクチャだよ」

と、口のなかでもそもそいった。

すると、信一のうしろの高木昭^{たかぎしょういち}一が、タコみたいに口をつきだして、

「明のいうとおりだよ。よそのクラスなんかやっていないのにさ。どうしておれたちだけ、四十枚も書かなくちゃいけないんだよ」

と、いった。

「まったくだよ。先生ったら、じぶんばかり燃^もえちゃってさ。おれなんか、燃えるものなんか、な

んにもないね」

信一はふてくされたようにいうと、しらけた顔を窓の外にむけた。

すると、洋子が、へんにしずかな口調くちようになって、いった。

「でもね、先生が、いつもいうじゃないの。生おいたちの記きは、卒業証書そつぎようしゅうしょとおなじぐらいいいなものだって……」

「だけど、四十枚まいなんて、どうかんがえたってできっこないよ」

信一のうしろにいる高木が、洋子にくいさがってきた。

「洋子と、おれたちといっしょにされたら、こまるよ。頭の構造こうぞうが、まるっきりちがうんだからよ。」

洋子は、もう三十枚もいってんだろ」

高木の声が、教室じゅうにひびいた。

みんなの目が、信一たちにむけられた。

「もう、三十枚もやったっていうのは、だれだって」

うしろのほうにいる中村誠なかむらまことが席せきをたって、信一たちをのびあがって見たが、

「なーんだ。三十枚書いたのは、洋子だな。信一かと思って、びっくりしたよ」

といって、安心したように腰こしをおろした。

あちこちで、「おれは十枚だ」とか、「わたしは十五枚よ」などといっていた。

まったく手をつけていないのは、信一ぐらいらしい。

信一は、みんながむきになっていいあっているのを聞いているうちに、むきになることじたいが、ばからしく思えてきた。

「生[＊]いた[＊]ち[＊]の[＊]記[＊]とき[＊]い[＊]た[＊]だ[＊]け[＊]で、寒[＊]け[＊]が[＊]し[＊]て[＊]く[＊]る[＊]よ。お[＊]れ、ま[＊]っ[＊]た[＊]く[＊]書[＊]く[＊]気[＊]に[＊]な[＊]れ[＊]な[＊]い[＊]よ」

信一は、わざと大あくびをしてみせた。

洋子のひきしまった顔が、赤くなった。

「このごろの信一くんて、不良^{ふりよう}みたいでいやだわ。わたし、いっしょうけんめいになれないひと、だいきらい」

「どうぞ、どうぞ、きらわれてけっこう。へっへっへっへ……」

おちゃらけてみせた信一の頭のなかを、どうしてもすきになれない父さんのごつい顔がよぎった。

くやしがった洋子が、もっと信一をきめつけようとしたとき、チャイムがなった。

およそ十七、八人の、ふだん着すがたのお母さんたちで、教室のうしろはいっぱいになった。やはり、ふだんの授業参観^{じゅぎょうさんかん}とはちがうふんいきだ。

仕事にいつている信一の母さんと、病気がちの明のお母さんの姿は、なかった。

職員室しよくいしつにいつていた伊藤先生が、教室にもどってきた。四時間めまで、トレーニングウェアを着ていた伊藤先生は、青い背広せびろに着がえて、赤いしまのネクタイまでしめてきた。

「わあ、カッコつけちゃって」

と、だれかがいったが、だれも笑わなかった。

ざわついていた教室が、しーんと、静しずかになった。

伊藤先生は、背せがたく、色が白くて、黒ぶちのメガネをかけ、髪かみの毛はふさふさと、波うっている。

年は、三十二歳さい。いい家のおぼっちゃんという感じである。その白い顔を先生は、ほんのりと赤くしてうしろのお母さんたちを見るような、見ないような、それでいて、こちこちにかたくなりながら、あいさつをした。

「えー、これから、子どもたちの書いた、それぞれの生おいたちの記きをよんでもらうことにします。六年生の子どもたちが、原稿用紙四十枚げんこうようしに挑戦まいてすることは、たしかに容易よういなことではありませんが、六年生のきょうまで、じぶんがどのようににそだってきたかを、できるだけくわしくしらべてつづることは、これから、力強く生きていくための力になるのではないかと思うのです」

お母さんたちが、いっせいにうなずくのが、信一の目のすみにはいった。

「きょうは、小学校最後の授業参観日さいごのじゅぎょうさんかんびなので生おいたちの記きを、全員に読んでもらうことにします」

「ええ、そんなのないよう」

すすんでいない子どもたちが、いっせいに鼻をならした。

（そんな、ばかな）

信一は、青くなった。いくら母さんがきていないといっても、よそのお母さんたちが見ているまえで、はじをかくのはまっぴらだ。

成績せいせきのいい高木が、手をあげていった。

「先生、全員が読むと、ひとり一分しかないから、くわしくきけないとおもいますが」

やはり、かたくなっていたらしく、先生はほんのり顔を赤くしてうなずいた。

「全員に発表してもらいたいところだが……。それじゃ、たとえば、高木くんの生おいたちの記を聞きたいというように、なんんかを、みんなからすいせんしてもらうことにしようか」

「はい」

みんなの声を聞きながら、信一は、

（やれやれ、きょうのところは、たすかった。どうせ、みんなおれのこと、すいせんしないからな）

と、胸むねをなでおろした。

みんな、たがいに顔を見あわせていたが、なかなかすいせんしない。

「それでは、こちらからさそうかな」

伊藤先生は、手で、黒ぶちのメガネをちょっとあげながらいった。

明がうしろをむいて、ぐっと、からだをのばすと、

「信ちゃん、洋子ちゃんをすいせんしようよ」

と、小声ですばやくいった。

信一は、親指と人さし指でまるをつくって、OKオウケイのサインをしてみせると、ガタンと、いすをひいて立った。

「先生、渡辺洋子わたなべさんをすいせんします。もう三十枚まいも書いているし、お母さんもうしろに見えてるし、ぜひ聞きたいんです」

ぱちぱちと、たくさんの拍手はしゅがおきた。

伊藤先生が、洋子をさした。

「はい」

といって、洋子は、びっしりと書かれた原稿用紙げんこうようしを両手にもって、まえにでていった。

お母さんたちのあいだからも、拍手がおこった。洋子のお母さんだけが、下をむいている。

「それでは、わたしの生いたちの記を発表します」

洋子のすんだ声が、教室のすみずみまで、とおった。

「わたしは、いまから十二年まえの一月七日に生まれました。この日、川崎には、めずらしく朝から雪がちらついていたそうです」

信一が、うしろを見ると、洋子のお母さんが心配そうに、じぶんのむすめのようにすを見ている。

「わたしが生まれる二年まえ、母は、最初の女の子をお産しています。母は妊娠中毒症にかかったため、わたしの姉さんになるはずのその子は、未熟児のうえに、仮死状態で生まれたそうです。生まれて二時間後に、死んでしまいました」

しーんとなった教室に、洋子の声だけがひびいていく。

「お医者さんは母に、あなたは妊娠中毒症にかかりやすいので、子どもを生むのはあきらめたほうがいいですよ、といったそうです。それでも母は、生みたい一心で、病院に通いながら、わたしを生まれました。母は、いつ中毒症がでくるか、ずいぶん心配したようです。心配すぎたためでしょうか、わたしも未熟児で生まれ、たった二〇〇〇グラムしかありませんでした」

いつのまにか、口をかるくあけて聞いていた信一は、